

伊豆沼・内沼

嶋田哲郎(公益財団法人 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団)

■伊豆沼・内沼について

伊豆沼・内沼は宮城県北部に位置し、栗原市と登米市にまたがる自然湖沼である。沼面積は伊豆沼 369 ヘクタール、内沼 122 ヘクタールで、水深は 1 m 前後と浅いのが特徴である(図 1, 2)。ここには数々の水生植物が群生しており、水鳥や魚類の生息に適した環境をつくっている。

渡り鳥にとってわが国に残された数少ない、また最大規模の生息地となっていることから、貴重な自然湖沼として高く評価され、1985 年にはラムサール条約の国内 2 番目の指定湿地として登録された。ラムサール条約への登録を記念し、伊豆沼・内沼の環境保全と普及啓発を担う組織として、宮城県伊豆沼・内沼サントリアセンター(鳥館)、サントリアセンターつきだて館(昆虫館)、迫町サントリアセンター(淡水魚館、現登米市サントリアセンター)が建設された。



図 1. 西側からみた伊豆沼



図 2. 伊豆沼・内沼とその周辺施設

■伊豆沼・内沼の貴重な自然

伊豆沼・内沼の冬を代表する鳥はマガンである(図 3)。マガンは夏に極東ロシアで繁殖し、越冬のために伊豆沼・内沼に渡る。落ち穂などを主食とするマガンにとって、周囲が水田に囲まれた伊豆沼・内沼は良好な越冬地となっている。かわいらしい色合いをしたミコアイサ(図 4)をはじめとするカモ類も沼で越冬する。

夏にはカイツブリやカルガモが沼で繁殖する(図 5)。水面を覆うハスの中で、チュウサギが小魚を待ち伏せる姿も観察される(図 6)。

魚類の宝庫である伊豆沼・内沼では漁業が営まれ、1990 年代初頭まで多くの魚類やエビ類が漁獲されていた。コイ科魚類の1種で、現在は絶滅危惧種に指定されているゼニタナゴも、1990 年代中頃まで沼に数多く生息していた(図 7)。伊豆沼・内沼では毎年 4～5 t のタナゴ類が漁獲され、佃煮などに加工されて出荷されていた。

沼に広く分布していたジュンサイは、重要な産業資源の一つとして利用されたが、1970 年代以降ほとんどみら



図 3. マガン



図 4. ミコアイサ(写真:篠原善彦)



図 5. カイツブリの親子



図 6. サギ類(写真:篠原善彦)



図 7. ゼニタナゴ



図 8. ジュンサイとジュンサイ舟



図 9. 水中に生えるホザキノフサモ

れなくなった。かつては、写真のようにジュンサイ舟に乗って収穫を行なう風景があった(図 8)。水中で生育するクロモやホザキノフサモ(図 9)といった沈水植物も沼の全域に分布し、エビや小型魚類の重要なすみかとなっていた。

■現在の伊豆沼・内沼の環境と生物

ラムサール指定当時やそれ以前の伊豆沼・内沼は、多様性豊かな生態系であった。しかし近年、私たちの生活様式の変化や外来生物の侵入、水質の富栄養化などによって多様性豊かな生態系に変化がみられるようになった。

伊豆沼・内沼に渡来するマガンの数は 1990 年代前半には 2～3 万羽であったのが、2010 年以降 15 万羽以上にまで増加した(図 10)。現在、伊豆沼・内沼や蕪栗沼を中心に、宮城県北部には全国に飛来するガン類の 9 割以上が集まっている。マガンの急激な増加は、伝染病による大量死や沼の富栄養化の要因となる可能性がある。沼とマガンの保全を進めるため、宮城県に越冬するマガンを他の越冬地に分散させる必要性が指摘されている。

伊豆沼・内沼の魚類相にも変化が見られている。1990 年代になって外来種であるオオクチバスが伊豆沼・内沼で多く捕獲されるようになった(図 11)。オオクチバスは特定外来生物に指定されている魚類で、さまざまな水生動物を捕食することにより、在来の生態系を著しく悪化させることが知られている。伊豆沼・内沼でも、オオクチバスの侵入後、ゼニタナゴやメダカ、ジュズカケハゼといった小型の魚類が姿を消した。さらにこれら小型の魚類を捕食していたカイツブリやコサギ、ミコアイサなどの水鳥も沼で見られる個体数が減少した。



図 10. マガンの飛び立ち(写真:篠原善彦)



図 11. オオクチバス



図 12. ハス



図 13. アサザ



図 14. 伊豆沼漁協によるハス刈り



図 15. ハスを使った紙漉きの体験教室

沼の水生植物は富栄養化の影響を受けている。1960年代まで伊豆沼・内沼は水底が見えるほど透明度が高い沼であった。地域の人々は沼で水泳を楽しみ、水を飲用水として利用していた。この水環境の中、ジュンサイ、ヒルムシロや沈水植物といった比較的きれいな水を好む水生植物が繁茂していた。しかし水田からの除草剤の流入や富栄養化による水の透明度の低下によってこれらの水生植物は減少した。

現在の伊豆沼・内沼は、ハスやアサザといった植物が沼一面を覆っている(図 12, 13)。これらの植物は富栄養化した環境を好む植物である。8月には「はす祭り」が開催され、ハスは地域住民や観光客の目を楽しませている。しかし、美しい花園は一部の植物しか生育できなくなった沼の現状を示している。

沼の自然再生の方向のひとつは、バスなどの外来魚を駆除して小魚やエビ類を増やし、魚食性鳥類の個体数を増やすことである。バス駆除は春期の繁殖抑制、秋冬期の個体数抑制、集水域のため池からの流下防止の3つの観点から行っている。2004年以降の繁殖抑制をはじめとする駆除努力によって、バス駆除量が年々減少し、小魚類が増加する傾向にある。

もうひとつの方向性として富栄養化防止があげられる。沼のCOD値はここ20年ほどの間8~10前後の値を示している。水質改善の対策としてヨシ刈りや野火、ハス刈り(図14)などを行って植物体に蓄積された栄養塩類を系外に出す努力をしている。そして刈り取ったハスなどは紙漉(図15)や堆肥などに試験的に活用し、地域の産物が地域で循環するような仕組み作りを模索している。

自然再生は息の長い取り組みである。伊豆沼・内沼のような二次的自然は、自然を取り戻しつつ、それを活用して維持していくことが求められる。その過程において、現在委託費で維持されている保全活動が、循環によって利益を生み出す地域活性に変化することが重要である。

